

サラワク州と高知県の山村における人口減少・高齢化の課題の共通点

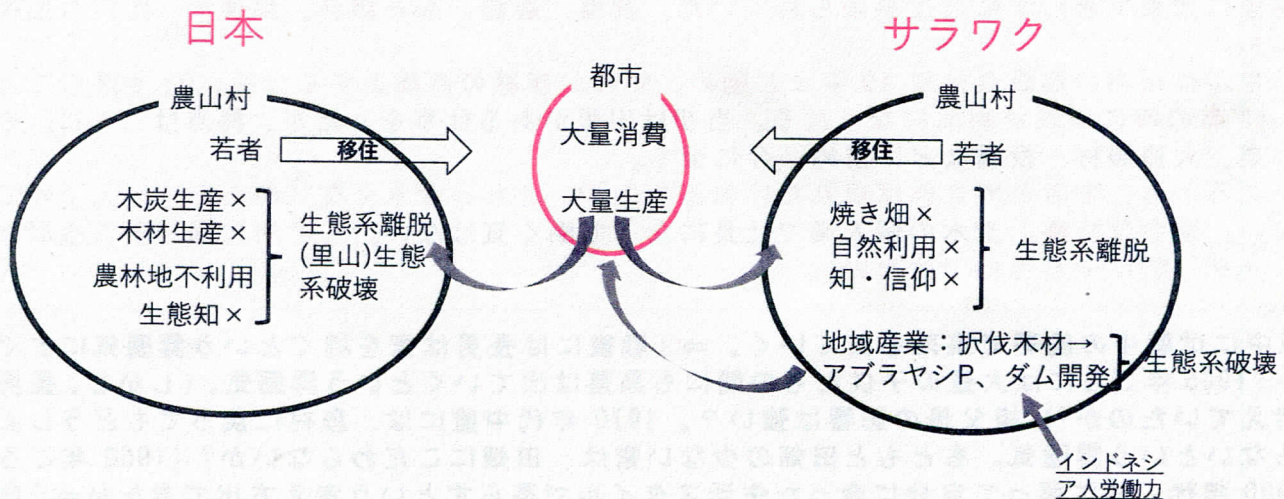
山村の過疎・高齢化によりみられる人口減少・高齢化の現象それに伴う課題については、両地域の間で共通点もみられるが、生態・社会環境が異なるために相違点もみられる(表1)。

共通にみられる点は、貨幣経済の浸透やグローバル経済化の下、山村での仕事が減る傾向にあり、一方で都市での仕事が増えたことにより、都市に出る者が増えていることである。山村周辺の生態系は、高知県のように人工林や里山の不利用、あるいはサラワクのプランテーション拡大のように地域生態系に大きな影響を与えている。この点は、世界各地の農山村で見られるグローバルな課題になりつつある。すなわち、地域生態系からの離脱がみられる。

表1 高知県とサラワク州の山村における人口減少・高齢化とそれによる課題の比較

比較項目	高知県の山村	サラワク・バラム川中上流域の山村
過疎・高齢化現象	炭焼き等の仕事がなくなり、1960年代から若者の都市(大阪)へ移住が盛んに。現在は自然減進む。Iターンは少ないがみられる。	木材伐採が下火になった1990年代から都市への移住が増える。人口の社会減進む。移住先はほとんどが下流のミリ市。
課題		
農・林活動	放棄農地・林地が増える。代々管理してきた農林地が荒廃し、原野に戻っていく。文化消失。生活環境劣化により移住者来なくなる。隠れ場ができ獣害増える。	焼き畑ベースなので、耕作後の放置・森林化は織り込み済み。耕作地の減少で獣害は集中。
	農地・林地の所有者が分からなくなり、住民が農林地を利用したくてもできない。	居住地から遠い土地では境界不明確、所有者不明問題あり
村の社会維持	狩猟者、生活者減少により獣害増加し、農作物や住民へ危害深刻化	ネズミヤスズメ害を理由に焼き畑やめてしまう人や村多い。イノシシなどの狩猟者はまだ多いかもしれない。
	山の資源利用の技術の不継承で、資源が利用不可に	焼き畑、狩猟採集、儀礼などの知識・技術は断絶
家計維持	冠婚葬祭など集落行事ができなくなる。かつては多大な準備・運営と労力を要したが、今日では自宅ではなく式場を使い、準備・運営は会社がやるため、お金がかかるができる。神社や社寺の祭りの頻度は減少。	出先の都市に出て行くことが増える。都会では同じロングハウス出身者が集まって執り行う。
	集落のインフラ維持の共同作業できなくなる。道路管理、農地管理できなくなり、生活基盤維持が不可に。	同左。居住地周りは草刈り機や除草剤の利用も。必要なときはミリ市から帰村しやすい。
生活環境	現金収入を得るための仕事場に限られる。インターネットを使っての仕事。民泊など新しい仕事もみられる	木材伐採の仕事減少。プランテーションは進出しているがインドネシア人労働者が参入。村での観光振興、民泊などの試み。
	ガソリン代、高速代など移動費がかかり、生活サービスや現金収入を得られる都会に出ていきにくい。	高知と同様に、自動車4WDやガソリン購入費に交通費がかかる。
地域開発	商店、病院、役場、郵便局、JAなどの閉鎖により、生活が不便になる。生活環境劣化により移住者来なくなる。移動スーパー、デマンドタクシー、宅配などの対応策があり。	都市に比べ貧弱だが、道が整備され、都市や街に出やすくなった。拠点集落が作られ、学校、保健所等を整備されることもあり。住民の自動車によるひと・荷物の運搬仕事
	道路や橋などのインフラ劣化し、生活が不便になり立ちいかなくなる。生活環境劣化により移住者来なくなる。	公道は少なく、道路は木材伐採やプランテーション会社が作ることが多い。会社が撤退すると道路維持されない。
地域開発	小中高校が閉じ、教育サービスが受けられなくなり、子育てができなくなり、都会に出る。移住者来なくなる。山村留学、村営塾などの対応策あり。	多くの村に小学校がまだ見られる。中学以上は町や都市で寄宿。
	補助金によるインフラ整備は減少傾向。民間企業は少ない。	木材伐採、プランテーション、ダムなどの開発の進出し、村領域を浸食。村の抵抗力減

地域生態系離脱と他地域生態系破壊



都会へ出たころの大豊町怒田の状況

○森栄太郎さん(1927年生まれ)、和子さん(1935年生まれ)

・栄太郎さん：尋常6⇒高等2年⇒青年学校4年だが、3年で兵役志願。男は1回は兵隊に行けという教育と雰囲気。S20.1少年飛行兵志願(海軍)17歳。とにかく早く志願して、上の階級に行きたかった。少しでも早く出たかったが、とくに帰ってくることは考えていなかった。

・怒田に帰ってきて、国鉄の駅員になろうとした。当時、駅員は女性職員が多く、男性と入れ替えていた。父に反対された。役場職員ならいいが、駅員はだめ。

・家の仕事をした。父は屋根わら吹き職人だったが、栄太郎さんは高いところが苦手で、父も強制はしなかった。当時の現金収入は、養蚕か炭焼き。

・当時は長男は家を継ぐものだという雰囲気。和子さんはS31年12月嫁いでくる。一芳さんS34.4.12生まれ

・一芳さん：大平の小学校卒、下の東豊永中学校へ2年まで。3年は大田口。卒業後、東工業高校電子化(小さいころから自動車が好きだった。卒業後、横浜の日産工場に、その後、間もなくして福岡へ転勤。1万円を仕送り。積み立て。女ができれば戻れなくなるので、できる前に戻りたい。爺さんから長男は家を継ぐという教育を受けたのが大きいと栄太郎さんは言う。ここで半官半民の有線放送の仕事。初めての給料日にため息、嘆息。あ～あ！。6万9千円。日産時代は残業入れて14,5万円。

・栄太郎さんの姉の豊美さん：どうして一芳を戻すの！ 日産は給料いいのに。丸亀の「しょうでんさん」に行き、当時よく当たる女の占い師にみてもらう。後々を考えて戻すのがいいといわれる。

・一芳さんから依然聞いた話し。小学校の時、先生が「大人になって大豊に残る人」と聞いた。一芳さんはみんな手を挙げると思っ、勢いよく手を挙げた。そしたら手を挙げたのは一人だった。友達にはここに残って何するの？といった感じでからかわれた。

○氏原学さん 1942年生まれ、小津高校をS41卒。

・家には田畑山林少なく、親は残らせようとしなかったし、残ろうということでもなかった。墓は守ってもらうが、外に出ていても守れる。当時、田畑山林を持っていた1/3ぐらいは長男を残そうと考えていたが、2/3は出そうと考えていた。

・健ちゃんのところのように土地があれば残す。長男は出して、外の雰囲気を味合わせずに残す。おじいさんと一緒に暮らしていると、苦労話を聞かされ、山林田畑を残していかねばという気持ちになる。

○秋山譲二さん、1964年生まれ 55歳

・東豊永小卒。同級生は30人ほどいた(4年生?までは大平の小学校で、現小学校跡は中学校)。中学は廃校になり、大田口へ。大田口の中学校卒。同級生は80人ほどいた。95%は高校進学。当時は親も先生も友達も町外に出るものという雰囲気を出していた。

・譲二さんは市内の工業高校に進んだ。郡部枠みたいなのがあったかもしれない。嶺北高校に進むものは全くなかった。市内にまかない付きで下宿。10部屋ぐらすすべて高校生の下宿。月3万円ぐらい。1982年高卒。

・卒業後に大豊で暮らすには仕事限られていた。役場、農協、森林組合、郵便局。ただし建設業はさかん。

・譲二さんは市内の建設会社に10年ほど勤め、転職。無線の点検をする会社。23,4歳のこと父親死。43歳の時に母親が病気になり戻る。当初は出張がある仕事をしたが、拠点はここに。その後、林業、大豊製材、役場などに務め、今に至る。

・若いころから、生活ができれば戻りたい気持ちあり。きれいな水、空気がある。一人でいても疲れない。都会は喧噪。土木の個人業で社長になって働く気はない。精神的に弱いところがあるし、リーダー的にやる性格ではない。

⇒①戦中には戦中の論理で集落を出ていく。⇒②戦後には長男は家を継ぐという雰囲気ですぐ戻る。⇒③1965年ごろには大豊の子供たちの間にも集落は出ていくという雰囲気。(しかし、長男はどう考えていたのか?) 祖父母の影響は強い?。1970年代中盤には、農村に戻ってもどうしようもならないという雰囲気。もともと田畑の少ない家は、田畑にこだわらないか?(1960年ごろ)。⇒④1980年代、村に戻って自分に合った生活スタイルで暮らすという考え方出てきたか⇒⑤自分の田舎が好きな若者出現。郡部の中心でサラリーマン両親のもとで育つ。